TOKYO GEIDAI

東京藝術大学　国際交流棟
Hisao & Hiroko TAKIPLAZA

MESSAGE

日比野　克彦

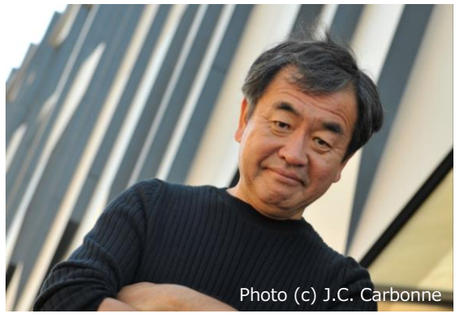
現代美術家　東京藝術大学長

見慣れた風景が違って見える時がある。そんなシーンを想像してみてください。もしくは過去にそんな経験をしたことがあるならば、その時の自分を思い出してみてください。それは見ていたものが違っていたのではなくて、同じものが違って見えたということ。それは自分の中の何かが変わった瞬間に出会ったということ。その体験が自己を追求するスピードを加速させる。人間の２４時間は誰しもが２４時間だけれども、このスピードが自己の中に流れこんだ時には、時間を伸縮させながら自分の中を自分が駆け巡っていくという不思議な旅をする。そんな旅は母国を離れた時にも体験できるケースがある。海外という見慣れない風景のある場所に身を置いた時には、同じ地球上だけれども時間が違って流れてくる。それは時を伸縮している瞬間である。そこに起こる「差」がこれまでの自己の中でたどり着けなかった自己の奥深いところに連れて行ってくれる道先案内人となる。国際交流には「差」と出会うシーンが連続して現れてくる。交流とは「差」の交換なのである。国際交流棟では自分の中を自分が駆け巡る体験が生まれる場面が数多く起こることを期待します。

滝　久雄

文化功労者　東京工業大学名誉博士
公益財団法人日本交通文化協会　理事長

私は「留学生を大事にしよう」「日本と外国の学生は不断に交わり、相互理解を深めよう」と繰り返し述べてきました。東京藝術大学の国際交流棟が双方の活発な交流を生み出す場となっていただければ、寄贈した者として大変嬉しいです。
日本の安全保障は、軍事力の高い壁を張り巡らせることではなく、日本の開放社会の魅力と日本人の考えや生き方を外国の人に知ってもらい、「国際社会で日本は大切な国なのだ」と思ってもらうことです。留学生が本国に戻り、さまざまな分野で親日派、知日派のリーダーとなっていった時、そのプラス効果は計り知れないものがあります。また留学時代の深い交流で築かれた日本人と留学生のネットワークの存在は、結果的に日本とその国の関係を太く強くしていきます。是非とも日本の学生は留学生に積極的に話しかけ、自分のことを伝え、相手のことを知ることに努め、相互理解を深めていってください。
すでに国際交流棟には双方がワークショップで製作した作品が飾られ、交流を先取りしています。世界共通のコミュニケーションツールであるアートを軸にした交流が、日本と世界のよき関係に繋がっていくことを心から願っております。



隈　研吾

建築家　東京大学特別教授・名誉教授

藝大に来た留学生を応援するために、アート作品が主役になるプラットフォームのような建築をデザインした。キャンパス側に向かった西面ファサードはアートの下地となるメッシュで構成され、様々な作品が入れ代わり立ち代わり取り付けられて建築の顔を作る。
屋内にも様々なところにアートが散りばめられ、4階の茶室では取手キャンパスで取れた竹や藁を原料とした繊細な和紙や、欄間彫刻や枯損木を活用した床柱も参加して、アートと建築とが一体となって日本の文化を発信する。細かいサインに至るまで藝大のアートが入り込んでいる。
また藝大の杜に融け合うように、建築の構造の大部分が木造となった。さらに内装や家具にも木をふんだんに使って、あたたかみのあるアートの杜をめざした。生まれ変わった学生食堂から藝大の杜を眺めながら、世界の様々な地域から集まった学生たちが互いの作品と文化を語り合う場になることを願っている。

PUBLIC ART　『共に藝える』Growing Art Together

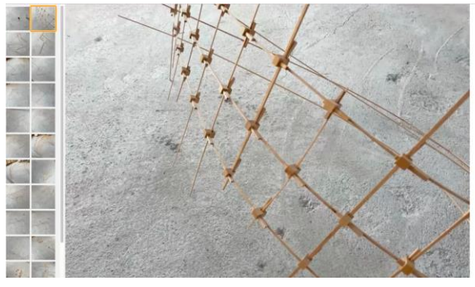
留学生交流パブリックアート　Public Art for International Student Exchange

留学生及び留学生OBが『共に藝える』のコンセプトをもとに、ワークショップ、2D・3Dデータ提出のいずれかの方法でクレアーレ熱海ゆがわら工房とコラボレーションして制作した陶板レリーフです。参加者は約30カ国（約150名）にわたり、2年かけて完成するプロジェクトです。着脱可能な設置にしているので作品の入替えや配置替えも自由にでき、様々な状況に合わせ広がりのある展示が可能です。
留学生が制作した陶板レリーフを通して、国際交流棟を訪れる人々との交流の礎になればと考えました。

総合ディレクション：日比野克彦
制作統括：藤原信幸
（工芸科陶芸（ガラス造形）教授）
制作コーディネート：藤田クレア
（グローバルアートプラクティス
テクニカルインストラクター）
企画：公益財団法人日本交通文化協会
製作：クレアーレ熱海ゆがわら工房

地産地消パブリックアート　Community-based Public Art

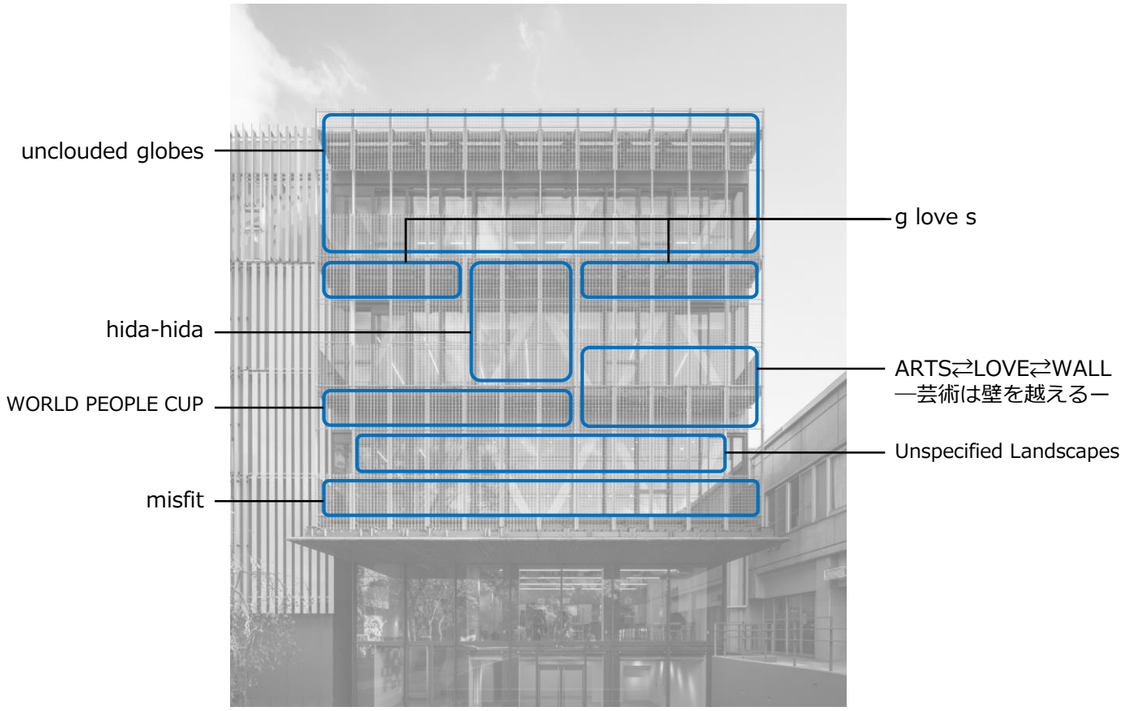
茶室の壁面、天井、襖、障子には取手校地の紙漉き工房で漉かれた和紙が貼られています。楮に取手産の藁をブレンドした和紙の他、障子には取手校地に自生する女竹の若竹を原料としたオリジナルの和紙が用いられています。
デザインの自由度の高い欄間については学内公募によりプランを募り、隈研吾、藤原信幸、三井田盛一郎、小谷元彦、片山まびによる審査の結果、入沢拓のプランが採用されました。入沢のプランは伝統的な楔による木組構造を軽やかに展開するもので、これまでにない欄間の在り方を期待させるとして評価されました。その造形は照明のシェードにも活かされています。床と床柱、炉縁は、2019年の台風によって上野校地で倒木したヒマラヤ杉を材料として仕立てられています。また、沓脱台は2017年に行われた藝大茶会で使用された立礼卓を再利用したものです。



壁面・天井・襖・障子の和紙
制作：宮寺雷太
（絵画科版画研究室テクニカルインストラクター）
欄間・照明
制作：入沢拓
（木工作家・元共通工房木材造形工房教育研究助手）
床柱・炉縁
制作：中内安紀徳
（工芸科木工芸研究室テクニカルインストラクター）
コーディネート：藝大ファクトリーラボ

PUBLIC ART　『共に藝える』Growing Art Together

変化し続けるパブリックアート　Everchanging Public Art



unclouded globes（建築科）

形態を構造解析して得た応力の違いを樹種の違いで解決し、木組による架構を制作します。
互いが互いを支え合う構造形式を用いて、強度の異なる木材が全体をかたちづくります。
すべての木材がシルバーグレー色に風化しても残る、木材の構造的特性を通して、素材の表層と深層を同時に扱うことを考えました。
かたちが、ただかたちとして存在すること。
素材が、素材らしくあること。
「それのそれらしさ」について考えます。

材質：木
製作：甲斐貴大（建築科）

g love s（前田建設工業）

国際交流棟の建設にはたくさんの方々の「手」が必要でした。工事中の現場からは毎週約100組の役目を終えた手袋が廃棄されますが、指文字によるメッセンジャーの役割を最後に託してみました。メッセージは「創造（create）」「続く(continue)」「変える(change)」という東京藝術大学と前田建設とで重なる３つの言葉です。私たちは制作を通して「建築と廃棄物」について向き合いました。この作品が皆様に廃棄物について考えるきっかけになればと思います。

材質：国際交流棟建設工事中に
　　排出された手袋、エポキシレジン
作者：綱川隆司、南健太郎、白石矩子、
　　岩坂照之、上田康浩、笹倉伸晃、
　　石川理人、若本喜美子
　　（前田建設工業設計戦略部/
　　ICI総合センター）
コーディネート：綱川隆司
制作協力：前田建設工業東京藝術大学
　　作業所、ICI総合センター

hida-hida（東京大学SEKISUI HOUSE - KUMA LAB ）

hida-hidaは、和紙素材の張り子で作られた一枚の長いリボンを襞状に折り曲げていくことでできる作品です。
和紙に特殊な加工を行い強度と耐久性をもたせることによって、建築では通常用いない屋外で和紙素材を構造体として作る挑戦をしました。
和紙特有の柔らかさによってかろうじて全体形状を保つhida-hidaは、光や風を受け、和紙ならではのゆらぎを生み出します。

材質：和紙
設計製作：隈研吾、平野利樹、安東慧、
　　秋本寛太

ARTS⇄LOVE⇄WALL　—芸術は壁を越えるー（デザイン科）

「他者を知る」「他者を想う」
– 壁や境界を芸術は超えることができるかもしれない　–
外壁に取付けたQRコードからWEBにアクセス。学生、卒業生、研究室などが作品を映像媒体で投稿し、国際交流棟内で作品が放映されるしくみを構築する予定です。
留学生作品や他科や他研究室の作品を知ることで、交流の第一歩としたいと思います。
試験運用として2023年4月まではデザイン科の学生、卒業生などの作品を紹介する予定です。
詳細は写真のQRコードからご覧ください。
https://www.love.geidai.ac.jp

材質：ターポリン
企画運営：橋本和幸（デザイン科教授）
デザイン：今村亮介（デザイン科大学院生）
　　南海宇　（デザイン科大学院生）
企画アドバイザー：大西景太
アートエンジニアリング：松山真也（siro）
映像提供：藍にいな、岩瀬香緒里、
　　大西景太、高本夏実、
　　シシヤマザキ、城井文、
　　鉾井喬 、山田知沙

WORLD PEOPLE CUP（ 日比野克彦とDOOR ）

「WORLD PEOPLE CUP」は、CUP(器)を「想いが宿るモノ」と捉え、カタールW杯アジア最終予選に参加した46カ国が、自国の文化を携えて世界に向かう気持ちを、粘土という素材で形作り、野焼きしました。一連のワークショップは「アジア代表日本2022」で始まり、東京藝術大学DOORの授業でも行われました。パブリックアートではこれらの作品の一部を、白磁の陶板（丸尾焼／天草）と合わせて設置しています。

材質：陶器
制作：DOOR受講生・修了生
　　東京藝術大学学生
　　大宰府市民
　　太宰府天満宮参拝者

協力：アジア代表日本2022

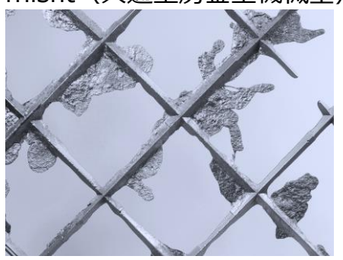
ワークショップアーティスト：布下翔碁
コーディネート：新妻葉子

Unspecified Landscapes（ GEIDAI FACTORY LAB ）

Unspecified Landscapesは不特定の誰かが撮影した、時代や場所が特定できない写真をモチーフとしたシリーズ。写真のネガポジデータを立体の厚みに変換して3Dプリンターで出力することで、均一な木理を持つ透過性のある立体物とし、イメージに差し込む光や風景との新しい関係性を付与することを意図しています。ここでは敢えて耐久性のない素材を使用して劣化していく過程を取り込む作品としました。

材質：PLA樹脂
作者：諏訪部 佐代子
（グローバルアートプラクティスM2休学中・
　オーストラリアに留学中）
コーディネート：藝大ファクトリーラボ
制作協力：長島友治、
　　たいけん美じゅつ場VIVA

misfit（共通工房金工機械室）



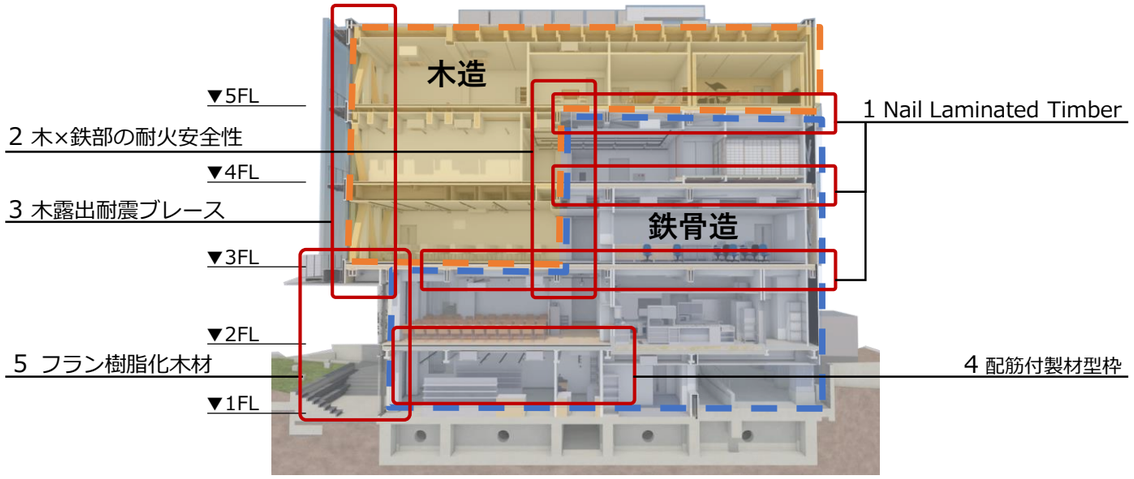
タイトルの”misfit”は”はみ出し者”という意味。本来、切り取られ、整えられてしまう”ばり”（鋳型からはみ出た部分）も美しいと捉え、作品に取り込みました。我々芸術家もある意味”はみ出し者”であるが、そこにこそ意義があり、多様性を生み出すものと考えています。建築と親和性のあるシャープなラインが見える外面と、流動的でムラのある内面とで異なった表情を観察できることも狙いとしています。鋳込みは取手校地に通う留学生と共に行い、意図を超えて冷え固まった形と表情には協働の瞬間が刻まれています。

材質：アルミニウム
作者：田中 航
（共通工房金工機械室
　テクニカルインストラクター）
コーディネート：藝大ファクトリーラボ
制作協力：共通工房鋳造室

ARCHITECTURE

木造×鉄骨造のハイブリッド構造による新しい建築の実現

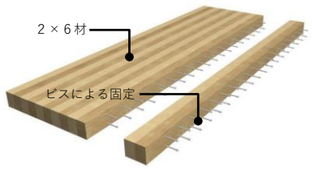
鉄骨と木のハイブリッド構造とすることで両者の特性を生かした建築としています。様々な技術を用いることでデザインや環境配慮、安全性といった各要素を高めた、これまでにない新しい建築を実現しました。



1 Nail Laminated Timber

3-5F床部分

Nail laminated Timber（NLT）は並べた製材同士を釘やビス等によって固定し床板を構成する工法です。
鉄骨部の床をNLTとすることで、建物重量の軽量化・工期短縮を実現しています。国内の大規模案件の床では初の採用事例となります。新しい木材の使い方として今後も使用が見込まれます。

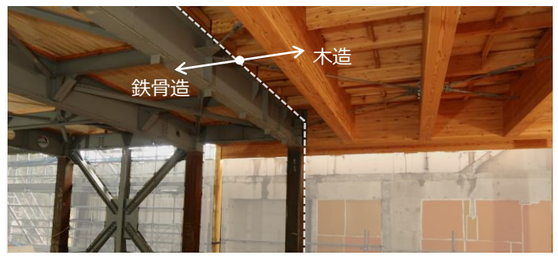


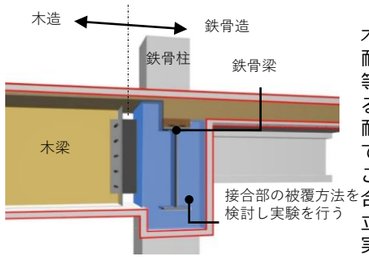
前田建設工業ＩＣＩ総合センター
人工気象室による温湿度変化実験

室内環境の変化による材同士の反りや縮みなどの懸念があったため、人工気象室を活用してNLTの収縮等の測定を実施し、使用上問題がないことを確認しました。

2 木×鉄部の耐火安全性

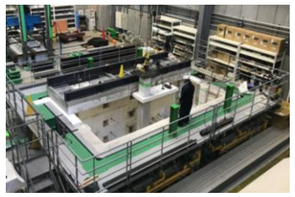
3-4F木造×鉄骨造接合部分





木造・鉄骨造に関する耐火被覆について告示等にて明確になっているものの、接合部分の耐火処理方法が法規上で明確になっていないことから、鉄-木の接合部のディテールを確立するため、耐火実証実験を実施して安全性を確認しました。

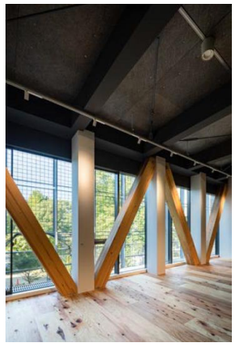
試験体の様子

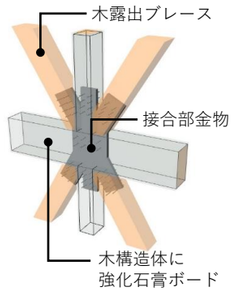


前田建設工業ＩＣＩ総合センター耐火炉

3 木露出耐震ブレース

3-5Fメインファサード

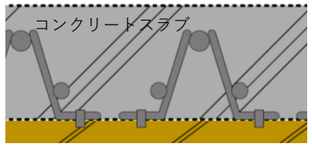




メインファサードの耐震木ブレースは建物の重量を保持する目的ではなく地震に抵抗する部材のため、万が一火災で損傷を受けても建物が倒壊する恐れのないことから、耐火被覆で覆う必要がなく、木の表面を露出することができます。また、室内に設けることで木材の経年変化を抑える配慮をしています。

4 配筋付製材型枠

1F生協エリア天井部分

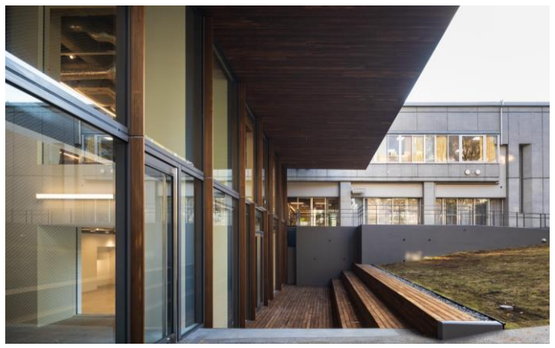


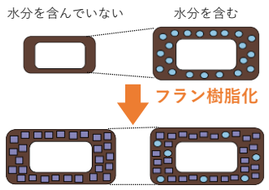
配筋付製材型枠イメージ

床型枠用鋼製デッキプレートの鋼製デッキ部をスギ板に代えた配筋付製材型枠を2F床に採用しています。床として必要な1時間耐火の性能は、コンクリート部のみで確保しているため、スギ型枠材は表しにて仕上げることが可能であり、容易に天井の木質化を実現しています。

5 耐久性に配慮したフラン樹脂化木材

1-2Fメインファサード＋デッキテラス部分

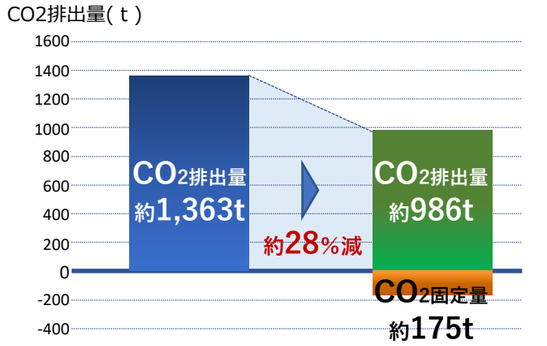


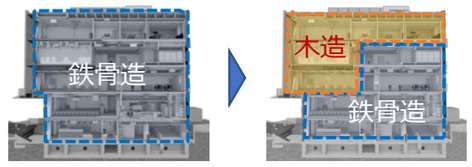


フラン樹脂化イメージ

フラン樹脂化は、木材を薬剤（フルフリルアルコール）に漬けることで木材の性質を変化させ、耐久性・寸法安定性を高める工法です。フラン樹脂化を施すことで、外装の木質化が容易になります。

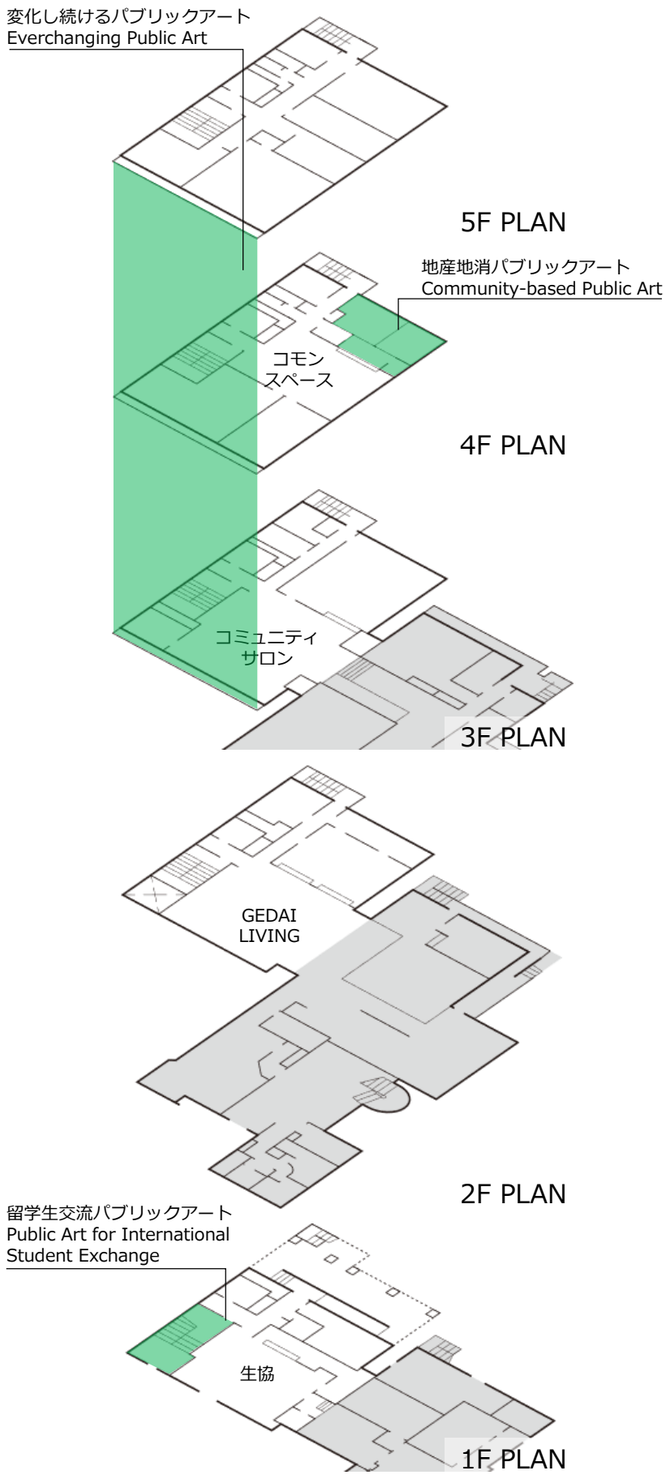
6 CO2排出量の削減



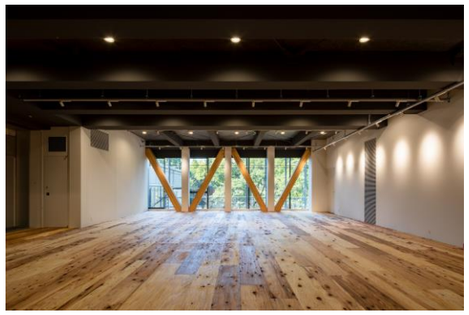


一般的な鉄骨造と比較し今回の木造＋鉄骨造のハイブリッド構造ではCO2排出量を約28%削減しました。さらに建物に使用されている木材に含まれる炭素により、約175t分のCO2を建物が固定していると言えます。
（One Click LCAによる前田建設の算出）

FLOOR MAP



4F コモンスペース



3F コミュニティサロン

2F GEIDAI　LIVING

1F 生協

建築概要

工事場所	：東京都台東区上野公園12-8
発注者	：国立大学法人東京芸術大学
設計・監理	：（基本設計）　東京藝術大学キャンパスグランドデザイン推進室、施設課 隈研吾建築都市設計事務所 （実施設計・監理）東京藝術大学キャンパスグランドデザイン推進室、施設課 前田建設工業株式会社一級建築士事務所 （デザイン監修）　隈研吾建築都市設計事務所
施工	：前田建設工業株式会社東京建築支店
耐火種別	：耐火建築
建築/延床面積	：373.24㎡ / 1,494.48㎡
構造	：鉄骨造・木造
階数/建物高さ	：地上5階建て / 18.65m

設計・工事	東京藝術大学	
STAFF	キャンパスグランドデザイン推進室	ヨコミゾマコト、谷章生（基本設計）
	施設課	東海林 憲生、櫻井 絢子、大沼 邦成
	隈研吾建築都市設計事務所	名城 俊樹、田野口 紘大、叶 子萌
	前田建設工業株式会社	永松 航介、近藤 佑哉　（設計）
		西川 功、宮崎 裕将　（工事）

©川澄・小林研二写真事務所